

# 高校2年生を対象とした国語科新単元学習の構築

## ——古典を深めて現代につなげる——

兵庫県立三木北高等学校 教諭 平松 はるみ

### 1. はじめに/背景

本研究は、高等学校国語科における、古典分野の授業改善を目的として行うものである。現在、高等学校で学ぶ生徒たちは、いわゆる「ゆとり教育」の中で学んできた世代であり、発言を求められれば積極的に話そうとする生徒も多く、環境や経済の変化には関心が高い。その一方で深くじっくり考えたり、他の多くの人々の意見に耳を傾けたり、その中からよりよい考えを高めていこうとする経験に乏しく、むしろ、即断できないことには価値を見出さないような傾向すら感じる。現代の高校生はとかく変化や結果には目を奪われるものの、普遍的なものや目に見えないものの確かな影響等というものに関心を寄せることは少ないのではないだろうか。それらは、流行の移り変わりの速さや政治への関心等、現代という時代の影響がそのまま表れており、結果がはっきりと見えないものに対しては関心を示さず、結論は誰かが導いてくれるものと放ってしまうようである。

だが、本当に何事も簡単に結論が出るものなのだろうか。ゆっくりとした時間の流れからしか見出だせないものもあるだろうし、気づくことが難しくても確実に表れる影響等もあるのではないだろうか。この数年、秘かに歴史への関心が高まっていると報じられる。また、漢字への関心も高まっているせいか、漢字を話題としたテレビ番組も増えたように思う。それらは、即断を求める現代の中にも、ゆっくりとした時間の流れを求める動きの表れと見ることもできるのかもしれない。

そこで、国語科として古典を題材として、生徒に考えを深める機会を設けたいと考えたことが本研究の一端である。

### 2. 目的

これまで、私は新単元学習法の構築を目指し研究を深めてきた。ただそれは、現代文分野を中心として、古典との比較や融合を試した機会はあるものの、古典を中心にはおいてこなかった。今回は古典を中心とした学習方法の授業展開を模索することで、生徒たちに学ぶ楽しさと考えを深める機会を設けることを目的としている。

そこで、本研究においては、教科書を一方的に教授する授業や古語単語を暗記する方法ではなく、生徒自身が考えたり行動したりしながら、生徒の感情を揺さぶる機会を増やすことを通して、古典を学ぶ楽しさを味わわせたいと考えている。また、古典を通して、過去の人々がどのような場面でどのように感じ行動してきたのかに気づけるような、授業展開を考えていきたい。

### 3. 方法

#### (1) 期間

2011年4月～2012年3月

#### (2) 対象

兵庫県立三木北高等学校 2年生の生徒

- ・文系クラス 2クラス 42名、38名
- ・2学期「総合的な学習の時間」 古典選択者 23名
- ・3学期「総合的な学習の時間」 古典選択者 18名
- ・選択授業 国語総合 選択者 54名

#### (3) 授業準備

教科書の教材による一方的な教授法によらず、生徒自身の活動を増やす授業を行うことによって、古典への関心と学ぶ意欲を高めたいと考え、以下の教材を準備した。

##### ① 資料映像・写真の編集

- ・現在の京都の風景や現存する建物や調度品等を撮影し、『源氏物語』の授業の際、建物や庭の造り、屏風や几帳の使い方、簾や蓐の開け方、牛車の乗り降りの仕方等、授業内の説明で活用できるようにした。
- ・『源氏物語』の映像は、かつて放映された源氏物語に関するテレビ番組と今回購入したDVDを用いてムービーメーカーを使って編集し、源氏物語の全体像がわかるようにした。
- ・『十八史略』の映像は、年始に台湾に旅行してDVDを購入し、中国語放送だったため、映像をそのままにして最低限必要な日本語の文字を挿入して編集した。

##### ② 漫画・解説書の利用

- ・『源氏物語』の漫画3種を購入し、同じ場面の描写の違いについて考えさせられるように準備した。
- ・『堤中納言物語』の漫画（中公文庫）と『ビギナーズクラシックス 堤中納言物語』（角川ソフィア文庫）、『堤中納言物語』（角川文庫）を購入し、生徒達が現代語訳する時に参照できるようにした。

##### ③ 調度品（ミニチュア）の購入

- ・1つずつ購入した几帳と屏風、3種類のお香を購入して、室内をイメージできるようにした。

##### ④ 模型の制作

『源氏物語』に登場する「六条院」の模型を制作した。模型は発泡ボードを土台として、春～冬までの町の全体が分かるように、木籤を柱に薄い板を壁にして建物を建て、庭や池なども立体的に造り、町ごとに花の色も変化させた。小さなパーツが多いため、全体をケース



(図1 六条院模型1)



(図2 六条院模型2)

に入れて授業で見せられるようにした(図1)。同様に、六条院の春の町を詳細まで説明できるよう春の町の模型も制作した(図2)。制作に至るまで『絵巻で楽しむ源氏物語』(朝日新聞出版)を読んでビジュアル的な理解を促し、構想、材料調達、試作に3ヶ月、制作に1ヶ月を要した。

#### ⑤ 『堤中納言物語』冊子作りの準備

生徒が調べて作成したプリントを一冊にまとめるため、卓上製本機「とじ太くん」を購入した。

#### ⑥ 助言

神戸大学名誉教授浜本純逸先生(鳥取県在住)より、古典で行う新単元学習の助言をいただいた。特に、高等学校での新単元学習実践が少ないにもかかわらず、今回はそれを古典に特化したものであるため、計画、メディアの利用方法、模型の意義等で助言をいただいた。千年もの時間を遡り想像することは生徒にとって大変難しいものであるため、生徒がイメージしやすいものを足がかりにして古典を学ぶことの必要性を再認識した。さらに、現在小学校で新しく試行例のある「論理科」についても示唆をいただき、高校での取り組みにつなげていけるように計画を立てた。

### (4) 研究授業の実施

(3)の準備を踏まえ、以下の授業を行った(表1参照)。また、各授業の内容とその手法について以下に詳しく述べる。

#### ① 源氏物語(11月～12月)

古典の教科書教材である『源氏物語』(「光る君誕生」「若紫」)を授業する際、教科書を用いた読解や文法の解釈をするだけでなく、源氏物語のあらすじを説明する上で『絵巻で楽しむ源氏物語』(朝日新聞出版)等を用いてビジュアルな理解を促した。また、この度購入した調度品のミニチュア(几帳と屏風)を見せたり、牛車や榻(しじ)や車泊は自分で撮影した写真を見せたりして説明した。さらに、3年生でも学習する内容を説明するために、自作した六条院の模型を用いて説明し、ビデオの視聴も行った。

源氏物語自体の面白さはもちろんのこと、私が編集したDVDで理解することによって古典

〔表1 本研究の授業内容一覧〕

内容	科目（単位）と時間数	教科書読解以外に用いた方法
①源氏物語（光る君誕生） （若紫）	・古典（文系3単位2クラス） 12時間 ・古典（理系2単位1クラス） 8時間	・絵や図説による説明 ・調度品（ミニチュア）を用いた説明 ・ビデオの視聴 ・六条院の模型
②堤中納言物語※	・総合的な学習の時間（1単位） 7時間	・漫画の利用 ・解説書の利用 ・現代語訳の添削等個別指導 ・冊子作り
③宇治平等院建立※	・総合的な学習の時間（1単位） 6時間	・紙で宇治平等院の模型を制作する
④御伽草子（物ぐさ太郎）※	・選択（国語総合3単位）6時間	・現在の風土と人々の暮らしを知る
⑤十八史略（赤壁の戦い）	・古典（文系3単位2クラス） 6時間 ・古典（理系2単位1クラス） 5時間	・漢字の解説 ・絵や図説による説明 ・ビデオの視聴と解説

※は教科書教材ではない。

作品がかなり現代的である点、例えば、源氏の恋愛が現代のドラマ以上にドラマチックである点に興味を持ったようである。また、私が撮影した写真を用いることで、建物の細部に興味を持ち、部屋の使い方や戸の開け方など、現在とはかなり変化している点についても興味を持ったようである。さらに、私が制作した六条院の模型へ興味は素晴らしく、指導者の授業への準備と熱意を最も賛美してくれた。六条院の説明のためというよりも、授業の重要性を強く伝えることができた。

## ② 堤中納言物語（9月～12月）

本学年は総合的な学習の時間の中で、2・3学期を合わせて前期後期に分け、様々な教科・科目につながる10講座を設け、その中から一人一講座を選択して興味を深める時間を設定している（前期7時間、後期6時間）。その中で、私は前期で古典講座（堤中納言物語をみんなで現代語訳する講座）を担当し、23名の生徒が選択した。この講座を選択した生徒は総合的な学習の時間になると、1教室に集まり、担当箇所を決めてそれぞれが現代語訳を試みるのであるが、そこで教科書では習わない『堤中納言物語』を扱った。グループに分かれて、それぞれが担当箇所を決めて現代語訳を試みた。その際、辞書を引く、既習の文法の確認、未習の説明等、生徒一人一人の学習レベルに応じた個別指導を行うよう心がけた。また、現代語訳では、解釈の誤りを即座に訂正せず、漫画（『堤中納言物語』中公文庫）や参考図書の該当箇所を読ませることにより、生徒自身が気づけるように促した。一人一人が現代語訳することが最も難しく、生徒達を書いた原稿を印刷し、それを卓上製本機で綴じて製本した。生徒たちは簡単に製本できることに驚き、ページをめくると一人一人が一生懸命原稿を書いたことに気づいて大変喜んだ。

### ③ 宇治平等院建立 (12月～2月)



(図3 宇治平等院製作風景)

総合的な学習の時間の中で、後期6時間を10講座に分かれて実施し、その中で古典分野に興味がある生徒(18名)を対象に、宇治平等院の模型を実際に作ることにした。生徒たちはすでに去年「夢十夜 第6夜」の授業に関連して、読解だけではなく東大寺南大門を実際に見学し、南大門の修理に携わった人のビデオを見た。実際に見た大きさとビデオから細やかな工夫を理解したことによって、生徒たちは作品の持つ魅力をさらに理解することができた。また、今

回の古典『源氏物語』の授業を通して六条院の模型に関心を寄せていたので、この度宇治平等院を制作することをとても楽しみにしていた。宇治平等院は藤原道長が譲り受けたものを子頼通が仏寺に改め、末法思想から極楽往生を願って建てられたものであり、古典の理解においても意味深い。また、平等院には平安時代の最高の仏師定朝によって制作された阿弥陀如来坐像が安置され、華やかさを極めた一つの姿でもあり、現在は世界遺産にも登録されている。模型制作を考えていた当初は、金箔の豪華絢爛な建築物よりも制作しやすいだろうと思い、また、茶色一辺倒の建築物よりも見栄えがよいだろうという甘い考えから宇治平等院に決めたが、実際に制作してみると、これまで考えたことのない疑問がどんどん湧いてきた。たとえば、「柱が丸柱の部分や角柱の部分があるのはなぜか」とか、「庭と建物のバランスや水の引き方、水を引きながら安定した建築物を建てるにはどのようにしたのか」等である。生徒一人一人が黙々と作業をする時間はあっという間に過ぎてしまい、6時間のうち2時間連続だった日は良好だったが、1時間で終わる日はあまり進まず、むしろ制作した小さな柱を保管することに苦心したり、小さなミスを修復しているうちに時間が終わってしまったり、制作しなければわからなかった虚しさを多く味わった。実際の建築の工程や順序を想像しなければ紙といえども支えられず、パーツを作るだけでなく、それを組上げる段になり、さらに難しさを感じ、生徒たちは当初の予想以上に疑問や思索を抱いた。本物の建築ならば、天候に左右されたり、重さに苦勞したり、予定通りにできなければ処罰されたりしたのだろうと想像し会話していくうちに、これまでの建築物への見方とは違う視点で興味を抱いたようである。

### ④ 御伽草子(物ぐさ太郎)(1月)

生徒たちが2月に修学旅行で軽井沢に行くことになっていたもので、同じ時期の選択授業(国語総合3単位)を用いて、軽井沢付近の昔話を調べ、軽井沢にゆかりのある御伽草子「物ぐさ太郎」を取り上げて、授業の中に組み込んだ。「物ぐさ太郎」の始まりには、貴族的な暮らしぶりを連想させる箇所が多く、それが平安ではなく東国への憧れのように描かれており、生徒たちはこれまでの京都のイメージだけでない古典の広がりを感じたようだった。生徒たちにとって現代語訳することはそれほど難しいものではなかったが、長い物語を読むことは初めての体験であり、教科書を理解することとは別の難しさを体験した。また、長い物語の落ちには、太郎自身が実は大変由緒正しい出自だったことが描かれており、これもまた平安時代を中心とした古典の授業とは異なり、現実世界と想像世界を行き来する物語の発展した姿を感じ取

れたようだった。6時間の授業の途中で、修学旅行に行き、実際に雪の様子や山の様子、東国との距離感、土地の人々に触れることによって、帰ってきてからの授業では、より想像世界を深めて読む楽しさを味わった。

#### ⑤ 十八史略（赤壁の戦い）（2月～3月）

現代文の授業や選択国語総合の授業でも漢字の解説を行うよう心がけているが、漢文でも白川静氏の説を基にして、漢字への興味を促せるような話を取り入れている。一例を挙げよう。「最」という文字は「日」と「耳」と「又」に分けられるが、「又」は「手」を意味していて、戦いで勝った証として勝者が敗者の「耳」を切り取ることが行われていたということだ。だから、「取」という文字は「耳」を「取」という意味だ。「最」は「取」の上に「日」があるが、「日」は袋を表していて、勝者が敗者の「耳」を切り取って、たくさんの「耳」を袋に入れている状態が「最」という文字なのだ。だから、一番たくさん「耳」を入れているから「一番＝最も」という意味になっているのだ。

授業に関連する文字からこのような解釈があることを話していくことによって、生徒たちは漢字への興味を増していき、進んで漢字検定も受検していくようになった。

赤壁の戦いの場面では、教科書読解の際、地図や絵を用いた説明はもちろん、中国製の映像を編集することによって、臨場感溢れる理解ができるよう努めた。台湾に旅行した際、中国製の映像を購入し、中国語だったので日本語の文字を挿入して生徒が見て理解できるようにした。授業で内容は理解していたが、映像は大変丁寧に作られていたので、船や河の大きさ、戦いに関わる人々の多さ等も想像以上のスケールだとわかり、漢文が苦手だった生徒もとてもよくわかったと言ってくれた。さらに、中国語の教材を用いて授業展開をしたいと準備を進めていたが、残念ながら時間が足りず実現できなかった。

## 4. 結果

教科書をただ読解することによって古典世界を理解することよりも、種々の体験を通して古典世界に触れることは、生徒の関心を高めることに貢献できただろうと確信している。実際、本学年の国語への関心は高く、英語を苦手だと意識する生徒は70%近くいるのに対して、国語を苦手だと意識している生徒は10%以下である。これまで漢字への興味は入学当初は低く、高校1年生時で漢字検定3級レベルの小テストを行っても80%の生徒が不合格であった。それが2年生末で、2級に6名合格、準2級に50名以上合格できるまでに至った。古典への理解も同様で、模擬試験も回を重ねるごとに理解が深まっていることがわかり、目下のところ平均点偏差値も最高偏差値も上がり続けている。やれば成績が上がるので興味も増すし、授業に対しても周囲の人が真剣に取り組んでいるので、それに合わせようとする生徒が増えるというように、順調に学習に取り組めるようになった。

## 5. 考察

現代文の研究を行った際、言葉で表現する抽象的な世界を理解しようとするれば、具体的な体験や感情が伴わなければ理解ができず、生徒たちは興味を増すことができないという結論に至

り、そのため具体的な体験につながるような授業を行いたいと心がけるようになった。それが、新単元学習法を高等学校にも応用したいと思った理由である。

古典への理解も同様だろうと思われるが、古典世界というのは遠い過去という時間がさらに問題を難しくさせ、誰にも具体的な体験を求めることができない。そのため、時間を経ても想像しやすいような場面、たとえば映像や制作などをうまく組み込む必要があるのではないかと考え、机上で古典を理解するだけでなく、古典をもっと立体的に实际的に現実的に理解する手法を取り入れたいと思うようになった。



(図4 六条院制作風景)

法を取り入れたいと思うようになった。

ビジュアルを用いたり、ミニチュアを手にとってみたりという手法ならば、従来の高等学校の古典授業と大きく変わらないことかもしれない。また、教科書にはない作品の現代語訳をまとめることも従来の授業の延長として考えられるだろう。しかし、指導者自身が編集した映像を用いたり、指導者が制作した六条院の模型を用いたりして説明した古典世界は、これまでの授業を超えた、生徒の興味を大いに高めたもの

のだと言えるのではないだろうか。さらに、生徒自身が試みた宇治平等院制作は、一見古典とは別の内容のようでいて、全く説明が書かれていない状態でモノを組み立てていくという作業は、意匠の巧みさと作業の難しさを想像させ、大きさも素材も異なるものの、建物を建てることによって誇示する権威や指示する立場と指示され働く立場という身分の差異等を彷彿とさせた。

古典というのは、文化を知るという意味だけでなく、生徒たちの思想や生き方に影響を与えるという大きな意味もあるだろう。だが、ややもすれば、高等学校を終えてしまえば、その大半は文学を学ぼうとしない限り、生活の中で触れる機会はなくなりかねない。せっかく覚えた文法も使う術はなく、面白さを感じていてもそれを深める方法はない。思想ほどの影響は与えられなくても、悠久な時を想像したり、生活の変化を想像したりできるような機会を、古典の授業を通して与えていく必要があるのではないだろうか。そして、それらは教科書の中だけは難しく、何らかの体験を通して考えさせることによって、生きた学びにつながっていくのではないだろうか。

## 6. 結論

私自身が教員として勤めるようになった頃には既に活字離れを感じていたが、その後どんどん加速していった。それを克服しようとあれこれ取り組んできたが、その中で感じたことは、やはり生活の中で継続されていく学びが必要だということだ。授業はそのきっかけに過ぎず、生活の中での気づきや納得があってこそ、授業の意味があるのではないかと思う。授業で習ったことを自分の体験の中で振り返るという瞬間が必要なのだ。

さらに、古典という分野に至っては、大学受験のための学習としてすらも価値を失いつつある。漢文を入試問題から外した上に、大学入試の多様化によって、難関大学ですら古文を課さない入試方法も増えた。それならば、なぜ古典を学ぶのか。「温故知新」といえば体をなした

ように見えるが、生徒自身がその必要性を感じなければ学ぶ価値はやはり保てなくなってしまっているのではないだろうか。古典自体の面白ささえわかれば、生徒たちはどんどん学び始めるだろうが、その域に達するまでには何らかの仕掛けが必要なのではないだろうか。今回はそのような思いで、教員としての古典への思い入れを映像の編集や模型作りや冊子作りという形で示しつつ、修学旅行に関連させた作品を取り上げて時代や風土について考えさせることで、古典世界と現代世界のつながりを考えさせようと試みた。

その結果として、古典の予習への取り組みがよくなり、古語や文法も自分で調べようと思う生徒が大半になった。また、源氏物語や三国志等の教科書に載っていない部分も知りたいと言う生徒もあり、本を貸すと自分で丁寧に読むようになった。生徒たちは、教科書を読解するだけではわからない作品世界を写真や模型やビデオで理解することによって、結局はもっと読めるようになりたいと思うようになったのである。

## 7. 展望

かつては活字離れが長く叫ばれていたが、現在の高校生は意外とテレビ離れが進んでいる。どの家庭にも大型テレビが置かれているにもかかわらず、趣味の多様化と核家族化によって、家族と共用するテレビというものから離れ、また、携帯電話やスマートフォンの普及によって、余暇を自分の世界の中に閉じ籠ろうという傾向があると感じる。それは、パソコンも同様であり、複雑なパソコンよりも自分が望む相手とのみ交流できる携帯電話やスマートフォンの方が簡単で便利だと考えているようだ。活字よりもテレビ、テレビよりもパソコン、パソコンよりも携帯電話、携帯電話よりもスマートフォン。これらが意味することは何か。その意味の一つは、ONとOFFがより簡単になっているものに流れているということだと私は考えている。斟酌したり解釈したり、推量したり逡巡したり……という曖昧さをどんどん排除し、スイッチ一つで自分の思い通りを表現できるような気がするものに、流れているのだ。しかも、OFFするタイミングは、時間の制約ではなく、自分が困ったりできなかつたりする瞬間である。つまり、現在の「簡単」や「便利」はOFFする簡単さや便利さのことなのだ。これは、高校生だけの問題ではなく現代人の傾向だと言えるだろう。

だが、現代の高校生はONとOFFの簡単さに傾倒しているに過ぎず、活字と映像を比較して活字を捨てようとしているわけではない。ツイッターやFacebookがその例であるが、人々は誰かとつながりを求め、共感者を求め、それを活字と映像の双方を用いて行おうとしているのではないか。欠席や遅刻が多い生徒の様子を他の生徒たちはよく知っている。「先生、あいつは学校に来ないくせに、ツイッターではよくしゃべっているよ。」と言われたことがある。学校には足が向かないが、人とのつながりは求めており、しかもそれは学校の友達が読んでいることもよくわかってつぶやいているのだ。ただ、複雑な思考を避け、相手からの批判を避けたいという思いが、簡単な手段を選択させてしまう。

そこで、国語科教員として行うべきことは、やはり活字への回帰と思考の鍛錬の機会を提示することではないかと考える。また、その際、古典が行うべきことは、言葉と思考の変遷をたどることなのだろうと思う。だが、それらをただチョークと黒板のみで行うだけでは、生徒たちの思考はシャットダウンしてしまうだろう。そこには体験や興味付けという仕掛けが必要なのだ。



今後はその仕掛けとして、CGを制作したいと考えている。今回は計画の上でCG制作まで行う予定であったが、時間が足りずできなかったことが大変心残りである。是非、時間を見つけ、臨場感溢れる映像を制作して古典世界を再現し、さらなる仕掛けを考え、現代の生徒たちが未来を考える機会を作りたいと思っている。

## 8. 参考文献

- ・『週刊絵巻で楽しむ源氏物語』(1～16巻)、2012、朝日新聞出版社
- ・村井康彦監修『源氏物語の雅び 平安京と王朝びと』2008、京都新聞出版センター
- ・五島邦治監修『源氏物語六條院の生活』1999、青玄舎
- ・京都文化博物館編集『読む、見る、遊ぶ、源氏物語の世界』2008、京都文化博物館
- ・<https://sekisuihouse.co.jp>「光源氏と姫君たち。その住まいと暮らしかた」
- ・[www.chubu.ac.jp](http://www.chubu.ac.jp) 建築資料制作室中部大学
- ・京都新聞出版センター DVD『源氏物語』
- ・NHKプラネット近畿 DVD『橋姫』
- ・『堤中納言物語』、1963、角川文庫
- ・『堤中納言物語』、2004、講談社学術文庫
- ・『落窪物語 堤中納言物語 (日本古典文学全集10)』、1972、小学館
- ・坂田靖子『堤中納言物語-マンガ日本の古典』、2008、中公文庫
- ・坂口由美子編『堤中納言物語ビギナーズ・クラシックス日本の古典』、2009、角川ソフィア文庫
- ・大和和紀『あさきゆめみし』(1～7巻) 2001、講談社
- ・長谷川法世『源氏物語』(上、中、下)、1999、中公文庫
- ・牧見也子『源氏物語』(1～5巻)、1997、小学館文庫
- 『三国志最強決戦読本』、2008、宝島社
- 『漫畫中國歴史8』2007、上人文化事業股份有限公司
- 『源氏物語を知る事典』2004、東京堂出版
- ・井上尚美他編『思考力を育てる「論理科」の試み』2008、明治図書
- ・潜力精緻影音有限公司 DVD『三國演義』